

6月18日(土) 実施

『高校生による復興支援ボランティア』報告書

H28.6.21(火)

引率者 井上



1. 天草工業～県庁まで

6:30 天草工業高校に『天草・天草工業・天草拓心（本渡校舎・マリン校舎）・牛深・河浦』の生徒と引率教師が集合し出発しました。途中で上天草高校の生徒・職員も合流し32名となりました。県庁には、松橋～益城間の高速道路を使う行程で行くことになっていたため、不知火町から松橋町にかけて広がるブルーシートの屋根や、湾曲する高速道路（右写真）、大きな橋が落ちて瓦礫となっている様子などを車窓から見ることとなりました。これも、今回のボランティアの目的の一つだったそうです。



2. 県庁で

9:00 県庁に到着した際に、バスの中で県教育委員会の方から説明がありました。災害ボランティアセンターから派遣されて来たことがわかるシール（名前はひらがな・血液型を記入）を利き腕と逆側に付けるという指示がありました。新館1Fロビーに入ると、テレビで見る蒲島知事と同じ作業着姿の方ばかりで、熊本県は2ヶ月経った今も全速力で復興に向かっているのだと感じました。その後、開会行事の中で牛田高校教育課長が『今回のボランティアを通して、被災地の実際を見て感じて、様々なことを学んでほしい』と話されました。



3. 県庁～西原村災害ボランティアセンターまで

9:30 県庁を出発し、健軍商店街の前の道を真っ直ぐに進み、西原村へ向かうという行程でした。その途中に、今回の地震で震度7を2回経験した『益城町』がありました。建物は全壊。もとのままの姿で建っている建物はほとんど見当たらない。想像を超えた風景がそこにはありました。瓦礫処理をするボランティア団体もいました。しかし、2カ月経った今も復興が進んでいない現状があることを知りました。なぜこのような状態なのかと話を聞くと、家の瓦礫を撤去し更地にするだけでも150万円以上かかるということでした。支援金のほとんどが更地にする金額に該当するため、当面の生活費や住居費を考えると、そこまでお金が回らないそうです。



4. 西原村災害ボランティアセンター

10:00から1時間30分滞在しました。長く滞在した理由は2つ。トイレが簡易トイレ4つしかなく、時間がかかったこと。教育委員会が段取りをされていたが、事前打ち合わせと当日の状況が少し変化していたこと。特に、大型バス3台が作業場まで直接行けないことの対応に時間がかかりました。テレビで、ボランティアの配置が上手くいかないという話題がありましたが、現場にいる人たちでも詳細を把握することは難しいことなのだから、上手くいなくても仕方ないことだと感じました。

その対応が行われている間、災害ボランティアセンターを見て回りました。日



本全国からボランティアにいられており、イギリスやフランス、カナダ、ベトナム、台湾といった海外からも複数人参加されています。総勢8000人。この日もボランティアセンターの方からの指示を待つ人々が多く座っておられました。



5. 農業支援ボランティアとは・・・

今回参加する農業支援ボランティアは、私の発想にない形のボランティアでした。震災直後に西原村にやってきた笠さん（大分県中津江村出身）が、西原村にさつまいも農家が多いこと、今年の収益を得るためには5月までに苗を植えないといけないが、それどころではないという現状を知り、支援しようとされたそうです。しかし、災害ボランティアセンターでは、個人の利益になる活動支援をしてはいけないという制限が設けられています。そこで、笠さんは西原村の商工会や県と話し合いを行い『農業支援ボランティア団体を作る』という具体的な行動を起こされました。西原村災害ボランティアセンターの一角に赤色のテントがあり、そこが農業支援ボランティアの受付場所となっています。5月6日に立ち上げ約2週間で1400人の方々が参加されたということでした。



6. 農業支援ボランティアの様子

今回は被災者である上田さんの『しいたけの原木を復元する』ことが目的でした。数千本はある倒れた原木を、80名の高校生が復元します。作業の説明や安全面の注意なども全て農業支援ボランティアの方（福岡県出身）が行ってくれました。力仕事でしたが、そこは協力し合い、各自ができることを探して1時間弱という短時間で復元しました。



最後に上田さんより。「ここは震度7を経験しました。人生長く生きてるけれども初めてでした。夜中にタンスが私の脇腹にあたり地震に気づきました。アバラ骨が2本折れていました。妻は数年前、脳梗塞を患い自分では歩けません。そういった状況で避難所生活を送ってきました。震災後に今回手伝っていただいたこの山に来たときは、もう今年のしいたけの栽培は諦めようと思っていました。でも、ボランティアの方が励ましてくださったり、こうして高校生の方々に来ていただいたことで今年もしいたけの栽培ができそうです。どうお礼を言っているかわかりません。本当にありがとうございました。」その後、天高生はそれぞれが上田さんと話をしていました。



7. 最後に・・・

私は、今回のボランティアに参加して学んだことが2つあります。1つ目は「できないで終わるのではなく、新しい形の支援を実現させることが必ずできる」ということ。2つ目は「その分野の素人であっても手伝うからこそ、諦めようとしたプロの方々にとって明るく頑張ろうと思うきっかけになる」ということです。私は震災1週間後に松橋の知人宅を訪れました。その際に近くのビジネスホテルを経営している夫人と話す機会がありました。夫人は「中はぐちゃぐちゃ。ホテルの経営はやめようと思う。」と話されました。私は「大変ですね。」としか言えませんでした。しかし、今回のボランティアに参加して、このことをとても後悔しています。あのとき『部屋の中を少し片づけてみませんか。手伝います。それから経営をやめるかどうか考えてみてはどうですか？』という声掛け、行動ができていればもしかするとホテルは存続できたのかもしれない。多く考えさせられる1日となりました。



私は、今回のボランティアに参加して学んだことが2つあります。1つ目は「できないで終わるのではなく、新しい形の支援を実現させることが必ずできる」ということ。2つ目は「その分野の素人であっても手伝うからこそ、諦めようとしたプロの方々にとって明るく頑張ろうと思うきっかけになる」ということです。私は震災1週間後に松橋の知人宅を訪れました。その際に近くのビジネスホテルを経営している夫人と話す機会がありました。夫人は「中はぐちゃぐちゃ。ホテルの経営はやめようと思う。」と話されました。私は「大変ですね。」としか言えませんでした。しかし、今回のボランティアに参加して、このことをとても後悔しています。あのとき『部屋の中を少し片づけてみませんか。手伝います。それから経営をやめるかどうか考えてみてはどうですか？』という声掛け、行動ができていればもしかするとホテルは存続できたのかもしれない。多く考えさせられる1日となりました。

“今だからできること” “今しかできないこと” が自分の中に必ずある

【参加した生徒の感想文】 ※記載は、提出した順番で掲載します。

3年 組 永野さん

地震が発生して2ヶ月が経ち、未だに仮設住宅を建てたり、避難したりしている人々がいる状況を見て、地震がもたらした影響は甚大なものだったと感じました。バスの中から見た益城町の風景は、私が想像していた以上に復旧しておらず、屋根がブルーシートで覆われ、家がいつ崩れてもおかしくない状況でした。天草高校でも物資を集めたり、募金活動を行ったりしましたが、私たちの力は微力であると改めて感じました。しかし、今回農作業の手伝いに参加させていただき、ボランティアで何かを元通りにすることも大事だけど、ボランティアの参加者が復興作業を通して熊本のことや、自分たちにできることを考えなくてはならないのではないかと感じました。私たちがこのボランティアで感じたことを天草高校の人たちに伝えて、みんなで熊本のことについて考え、できることをしたいと思いました。

3年 組 山下さん

今回、復興支援ボランティアに初めて参加しました。被災した土地に自ら赴いてボランティアを行うことは今までなかったので、どのようなものか想像もつきませんでした。被害の大きかった益城や阿蘇の様子を自分の目で見て、想像以上の衝撃を受けました。倒壊した家屋などが2カ月以上経った今でもそのままになっていたり、西原村の山でたくさんの木が折れたり、倒れたりしていました。

今回のボランティアに参加して、被災された農家の方、農業ボランティア団体を立ち上げた方、自分も被災しながらボランティアに参加した方、たくさんの方のお話を直に聞くことができました。私が見なさんに知ってほしいことは「経験がなくても、自分にはできないと思っても、何か自分に出来ることはないかと考える“気持ち”や“心”が大切」だということです。ボランティアの方がおっしゃっていましたが、被災された農家の方が自分の家のことで手いっぱいになり、農業を手放そうとしていらっしゃったところを、農業ボランティアのおかげで続けようと思った農家の方がいたそうです。この話からも、誰かのために動こうとする意志が大切だということ学びました。私は今回お手伝いをさせていただいた農家の方の「ありがとう」という重みのある言葉を忘れることができません。この言葉を胸に、これからの将来について考え直していきたいと思いました。

2年 組 山下くん

地震が発生した4月14日16日の後、私は必ず復興支援ボランティアに参加すると決意していました。西原村に移動中、最も被害の大きかった益城町を通りました。益城町の状況は、テレビや写真で何度か見ていましたが、実際に見ると言葉に出来ないくらい被害がとても大きく、驚きました。今回、被災された農家の方にお話を聞くと、一時は今年の農作業を全て諦めようと思われたそうです。しかし、ボランティアの方々を手伝ってもらうことにより、前向きに取り組んで行けたそうです。

私も今後、長期休暇の時には、積極的にボランティアに参加し、少しでも多くの方々の力になるよう努力したいです。この活動を通して感じたことを友達だけでなく、将来自分の子供など多くの人に伝えていきたいと思っています。

3年 組 澤井さん

今回、ボランティアに参加して益城町の現状に驚き、心が苦しくなって泣きそうになりました。写真を撮ろうと準備していたけれど、どうしてもシャッターを押すことができませんでした。でも絶対にあの光景は忘れることはできないと思います。それだけひどく圧倒された光景でした。

がれきの中に、電子辞書や勉強道具が埋もれているのが見えたときに、そこに住んでいた人はもしかしたら自分と同じ高校生かもしれないと思い、とても恐ろしく感じました。益城をバスで通った後、阿蘇に向かいました。阿蘇では、倒れてしまったしいたけの木を元に戻す手伝いをしました。腐ってしまった木もあったけれど、少ししいたけが生えている木もあって希望を感じました。作業は意外にもあつという間に終わり、もっとできることはないかと思う気持ちもあったけれど、それでも少しでも役に立てたことをうれしく思いました。ボランティアに行くことも大切だけど、その後の行動も同じくらいに大切だと思うので、これから自分が体験したことを、できるだけ多くの人に伝え、災害の恐ろしさを後世にも伝えていこうと思います。

3年 組 林さん

今回、地震後はじめて支援ボランティアに参加しました。私たちが行ったボランティアの内容は地震で倒れたしいたけ栽培の木を立て直し、もう1度栽培が行える状態に戻すという内容でした。

土地の持ち主である上田さんにお話を聞くことができました。

上田さんのような農家の方で、地震の被害によって畑が使えなくなり、出荷時期に間に合わず収入が不安定になったり、家の片づけに手が回らず、先の見通しが立たない状況の方が沢山いらっしゃることを知りました。ボランティアのおかげで、他のことに手が回るようになったと感謝の気持ちを涙ながらに伝えてくださった上田さんを見て、心の底からボランティアに参加して良かったと思ったし、役に立ったんだと実感がわきました。益城の状況も、被災地の人の声も、直接自分の目で見て、聞くことが大切だと思いました。直接見て聞いた私たちが伝えていけるように、頑張ろうと思います。

がんばるけん！

くまもとけん！

